

和歌

古語源秘抄

秘藏抄

下中

二

伊地知文庫

文庫20

324

2

60

55

50

45

40

文庫20  
324  
2

一 秘藏抄  
二 蔣飯  
三 東路子  
四 羽副鷹  
五 候童  
六 湊潘  
七 細泉  
八 色曠  
九 星白  
十 玉江草

伊地知氏書冊

二 富草  
三 宇都姫  
四 香帛  
五 黄丹  
六 鄙藩  
七 角柱  
八 遠遊  
九 浮見  
十 野狩人

三 筆登虫  
四 鳴棹  
五 燒帛  
六 更居風  
七 洞出  
八 佐波比古女  
九 假初  
十 白芥  
十一 夕衣



和名抄中

廿九 針目衣

卅 過難

卅一 鶯袖

卅二 急之肩袂

卅三 寢谷

卅四 茨須

卅五 奥原

卅六 美小々目

卅七 掬津首

卅八 縦懸和

卅九 水セ鳥

卅十 小蒲

卅十一 小家鶏

卅十二 留鳥

卅十三 濱萩

卅十四 杭神

卅十五 庭都鳥

卅十六 小江小鳥

卅十七 河波須

卅十八 燒鳥

卅十九 回手柳

卅二十 玄時星

卅二十一 玉回

卅二十二 千之呂虫

卅二十三 玉相

卅二十四 佐波ラ

卅二十五 纏居

卅二十六 長淺

一 蔦纏

貫之

けふより及行乃草いあ〜うし  
らやめハ行り、あををこ又函記

富草

あはぢりハうきこれ小田にそそめねく  
やみ茶れさかへうきハねくれ也

三 筆登虫

あそけはむ〜らねもい戸いやあそけな  
うさみは〜あそ聲らりゆさり  
美登虫ハ蚤と云く古筆乃あそけり

東呂子

真風

いさやまよ小田はあはれなるふゆを  
野分乃風し志れを思すれ

らるゝふ是き稲をまゝこれいあひま  
ちるりさ枝はらひまやうやうまはく

五  
宇都妙

うづのふもさるれ水やおまよ  
激毛のくせしつりまのあ

うづふの雨よの現乃水とふまといふ  
あふさしとら筆をとりて

六  
鳴棹

めうれい栗穂さすふあし  
鳴棹とらとまをうあひ

あふさる棹乃まれあふさるはけく  
あしとら山にたあはれまのあつて  
さふさくさふさくさふさく

七  
羽馴鷹

さるゆ孫より林簾乃里にむらま  
けりてはるは羽あしれ

鷹はさしとら雄鷹や苑くし

ありまをまふみゆとしく羽くくふおさし  
やと説もろ

八 我うやとに海へめらるるまゆらあや

コウ小山田より麻乃よりぬ

う海へめら家中にうまやうよよの成そたれ  
又うれう鉄とよ物成そく菅笠をうやう

九 立まきら麻の田成をぬぬくそ秋と鉄帛と

明日よりいやきうめそむ小山田れ

我うやととと志うそまうとめ

やまうらるる女の尾くまぬきりくそまみ

う乃あ戸より焼て田子たつそそのくま  
うまく麻れをぬぬくそ秋を焼帛と

ゆえれうかつう山乃きうぬよま

うりううそまゆほ音ま

かりわらうそまふ山うそまゆりやみう

海も云

十一 せむらうれ骨よおひな松う糸れ

あういゆまうそまにうてま

位うれまうそまのまをみくぬの泳くま

とぬきうれまゆまうま









業乃編戸始あちてしきりて

いりまきふんとの雲さきくたされとぬ班  
なり

二十

さちり・此乃さつのもきぬ山平に

おほつゝのわくもよふなるが 鎌丸太夫

を此こらとらつるもいさぬいこきりこい

しぬといたよりもおとせつゝをさち

きおこらとらあ

廿一

いあつたにさけりよめをさこれ浦子

さけりあぢみむよふふり

廿二

いさめとぬらりちやと

おちやまれゆつら紫うた落つて

あちちやとぬらり言のあわふ魚威

ちやちもしすふらぢとらり

あつたと

廿三

水乃またうすつゝぬまのち

いまたあつたにやけり

みりてぬらりもさ墓中よ

廿四

きりちりちり

山乃たぬらりこらり

月もさゆふさやうなぬらうし  
あつたさしと白小雲ありなぬらう  
あつたさしと

廿五

雅波江小きゆしとゆのりれらめ  
こすしとさくしとわさしと  
あつたさしとあつたさしとあつたさしと  
あつたさしと

廿六

あつたさしとあつたさしとあつたさしと  
あつたさしとあつたさしとあつたさしと  
あつたさしとあつたさしとあつたさしと  
あつたさしとあつたさしとあつたさしと

あつたさしとあつたさしとあつたさしと

廿七

あつたさしとあつたさしとあつたさしと  
あつたさしとあつたさしとあつたさしと  
あつたさしとあつたさしとあつたさしと  
あつたさしとあつたさしとあつたさしと

高亮

あつたさしとあつたさしとあつたさしと

廿八

あつたさしとあつたさしとあつたさしと  
あつたさしとあつたさしとあつたさしと  
あつたさしとあつたさしとあつたさしと  
あつたさしとあつたさしとあつたさしと

廿九

あつたさしとあつたさしとあつたさしと  
あつたさしとあつたさしとあつたさしと  
あつたさしとあつたさしとあつたさしと  
あつたさしとあつたさしとあつたさしと

人丸

三 此を身と果と云

日 此れ思ふ約と云ふに云ふれ

本下と云ふに云ふに云ふに同

三 此れ思ふに云ふに云ふに同

香風と云ふに云ふに云ふに同

玉はこゝに云ふに云ふに云ふに同

三 此れ思ふに云ふに云ふに同

三 此れ思ふに云ふに云ふに同

此れ思ふに云ふに云ふに同

此れ思ふに云ふに云ふに同

も草と云ふに云ふに云ふに同  
生れしと云ふに云ふに云ふに同  
云々

三

此れ思ふに云ふに云ふに同

此れ思ふに云ふに云ふに同

此れ思ふに云ふに云ふに同

此れ思ふに云ふに云ふに同

此れ思ふに云ふに云ふに同

此れ思ふに云ふに云ふに同

此れ思ふに云ふに云ふに同

さよりのうらみとけしき  
嬌をうらみとけしき  
さよりのうらみとけしき  
眼縫志す夜れ神とま  
ちり

楳乃女う山田ふえり  
うらみとけしき  
えくれりふい荷し

夜もあきいれし  
まふにむしとけしき

まふにむしとけしき  
あきいれしとけしき  
まふにむしとけしき  
ちり

暁のきれとけしき  
まふにむしとけしき

あきいれしとけしき  
けり鷲やとけしき  
あきいれしとけしき

うれ青河原やなとあしやそくふく

去うそしきる乃くまに極る

廿八

ふくちきまのくちくちりわやの  
八重紅梅の花かちりし 公忠

みくめとりとくまひをけき

廿九

きぬふまた廿のけいなるのまきた  
これより入る雪よりおきり

なぬまのくちりし

卅

ぬまの海よりきりくちりわやの  
ぬれぬは床の孫こちりし 業平

ぬれ玉のまをとりし

卅一

ぬれ玉のまをとりし  
又旁これきりし

ぬれ玉のまをとりし

卅二

ぬれ玉のまをとりし

ちりちり

ちりちり

卅三

よはれぬるまはひのまをとりし  
ちりちり

よまううう丹なあり信子うう  
まのまうううううううううう  
貝をうう出うううううううう  
ううううううううううううう  
うううう

四十四

いうううううううううう  
契うううううううううう

枕うううううううううう

四十五

うううううううううううう  
うううううううううううう  
うううううううううううう

おのううううううううう

四十六

うううううううううううう  
うううううううううううう  
うううううううううううう

うううううううううううう  
松海うううううううううう  
うううううううううううう

四十七

うううううううううううう  
うううううううううううう  
うううううううううううう

うううううううううううう  
浪うううううううううううう

四十八

うううううううううううう  
うううううううううううう

こころもさかきとさくしゆくしゆくしゆく

四九 みささめは梅う枝よ木つらひく

花さこちししきもちきなく人丸

尺ゆめとら尺瓶さ書りみれくき百千

身とらうきひきさしゆ

定げその不里さゆよみさめら

寄よりささるし船さぬぬぬぬ

是もみぶとらさし

五丁 こた孫つよささる小きよりみぬ

うきひきささるし夢のちききた 赤人

ささる小身とら夢乃おやしくさひきと丸

のれいゆきやうよりたあさくささるこ

きとつささる

ゆき井すぶゆきまみくのありくせ

神もささるをうらとささる人

まさわいまりり春さふしゆまさる人と女

神ふうきよとささるありこれのうら

神も所とささる人ささる

日本紀ニ云

くくつらみりつ戸の思ふしあも思ひ

さ東まみく何うよ神樂よ

好況ニ云よひのまの夕まき人よあふけ

五十二 忽れいさよすまき人よき

ちりやあ神の馬あさうらうい

いこ代うあうゆつうけあきせき

あつら中津国よ天稚彦を申し

神の家乃前より極さうり木く日本

紀委りり

五十三 らもやあおさすれ時のこわよき

宜ね々あひくこ何あすも真凡

みまのよ神乃多くこまの酒くこた

五十四 以とも神よりあはつのみこま

おささあさや神のまろれあか

我は戸招く人こあこむ人丸

おさもあさこもたらわこまこ

太刀よの伊勢諾伊勢冊子乃躰繪

あかしくあつら十拳れ楯の左太刀

日本紀あり事あうあひ不言

わすはれ浪乃まはくきあひ



いさくも船まゝにけり 業平  
いさくも船まゝに帆つけし舟とていさく  
きゆせしゆにけり義也

秘藏抄下

鳥部

一 志まひるせらふにけりいさくも  
いさくも船まゝに帆つけし舟とていさく  
きゆせしゆにけり義也  
二 志まひるせらふにけりいさくも  
いさくも船まゝに帆つけし舟とていさく  
きゆせしゆにけり義也  
三 志まひるせらふにけりいさくも  
いさくも船まゝに帆つけし舟とていさく  
きゆせしゆにけり義也  
四 志まひるせらふにけりいさくも  
いさくも船まゝに帆つけし舟とていさく  
きゆせしゆにけり義也  
五 志まひるせらふにけりいさくも  
いさくも船まゝに帆つけし舟とていさく  
きゆせしゆにけり義也



あま

五月雨のや同よあつてはぬら

おもしろいほのこすの島 思主

斗多のなとふもやあく多く板の異は  
 月うかたのきあつてはたさか  
 らも多くけ美らの中にわすれ  
 りてはれりしあつてはたさか  
 とはさりたれぬもあつては  
 四月五月六月りあつては三月  
 ますしあつてはあつては

あまの海あつてはれよれ島 葉平

はもくさつては下流男をさくよふも  
 やま島をのつれりきむひあつては  
 海をさつてはよとまをい海の奥れ  
 穴をかりとくまをいむくあつては  
 大まをいぬれてあつてはさか  
 うつてはさつてはよとまをい

山あつてはさつてはよとまをい  
 月あつてはさつてはよとまをい 人丸

つてはさつてはさつてはよとまをい

和名抄

三十一

ついでに木を焼く事と云ふ事には  
さうの事やらて落さく

<sup>十</sup> あつたてしむはあつたてしむなり

野鳥の穴を火に灰をかきぬき

まのぬきを雄なりまのぬきを雌なり

焼ぶるもたき焼死なり

獸部

<sup>十一</sup> 山の旁に女をまよわす

ものあつたてしむはあつたてしむなり

まのぬきを雄なりまのぬきを雌なり

なり

<sup>十二</sup> ついでに人をも焼く事と云ふ事

いさむれうらにま火をたき 家持

のこし人を焼く事と云ふ事と云ふ事

まのぬきを雄なりまのぬきを雌なり

まのぬきを雄なりまのぬきを雌なり

まのぬきを雄なりまのぬきを雌なり

なり

<sup>十三</sup> まのぬきを雄なりまのぬきを雌なり

まのぬきを雄なりまのぬきを雌なり

徐養父

らさくぬまゝと猫をよそやしらぬと鹿を  
よそやしらぬと猫をよそやしらぬと鹿を

十 官城野の山萩の下の萩とて

おやももぬきぬきむしむし 小野皇

喜むむしむしと鹿のちのちとて鹿とて  
て及みぬと事か 中親一筆のり  
あそくらむとて

十五 さくらを葉れ戸とてあそむ

ゆきれとをよそやしらぬと鹿を

草部

十 我やあそむとてあそむとてあそむ

花とさくらにむしむしとてあそむ 守屋

みよとてあそむとてあそむ

十七 あゆみ人いさやとてあそむ

よりあそむとてあそむとてあそむ 閑院

ら戸つ人とてあそむとてあそむとてあそむ

あそむとてあそむとてあそむとてあそむ

十六 あそむとてあそむとてあそむとてあそむ 元方

あそむとてあそむとてあそむとてあそむ

十九 ちかれ池乃きーは月の夕まきれ

浪ふりつらふみとも茶の那 人真

かひそ茶との菱をきく池沼おしとに水れ上

う浮たれ根うやあさく

廿 けくまの沼乃みしをぬかすけりく

鳴落の声いあひぬかすうか 人真

みへるささおふ菱をとりつらうつらぬ印さつ

この玉うらり

木部

廿一 ちたつ和しやまのあつたさうーい

子世木れ枝よけるをうふあり 中々

千世木との松をきく松いふ年うさとしつ

付くふ世木と云ちり

廿二 祓やちつたをさるたの紫よ見かけも

むとひそりそぬおむ玉れ菱

ちるたつた紫よかーちの紫くゆる玉とぬ

二十 ちと云く

廿三 大井川いづれの後とさるんち孝

志何乃さのこれをもや都てして 兼藝法師

いづれふ枝をきく志何乃おのことぬ下麻布

ふり

雑部

廿四 夜やしもさうらにむらぬはれそよの  
あけけけれゆきさゆさふ 赤人  
あささきは花とら蕭薇をまき

廿五 五月西に池の水系朽りまら  
今あは志けく螢いふよ 黒人

ふくと有く  
廿六 冬くれ四方れ梢ハ紫妙りまき

霜しりりそよ下れハ芳きふ 雨院

まふいしそよの及黄萱芥と云木も冬も枯も  
して常葉ありかりくゆよ露ありあつた

廿七 花さうたよー野れ山乃ひらりまら

あふいしくふりりー吹く女小聖皇

あふいしくふりりー吹く女  
たくも及りりりーこくやふふくさる  
吹うー女とまき

廿八 在曙乃月入るたほ少りまき決

秘苑抄一

七

西にむすもみ鳴すたたり

漢人不知

おもしろく山乃ささり

深養父守云

おもしろくもみ鳴すたたり

おもしろくもみ鳴すたたり

富士十名 他本

藤嶽

鳴澤高根

常盤山

塵山

二十山

三重山

新山

見出山

三上山

神路山

秘苑抄下終



